成蹊大学日本文学科　日本探求特別講義B

2012年後期　**江戸の本づくり**

# 第３回　作者の強い出版熱　私家版の実態

**橋口　侯之介**（はしぐち　こうのすけ）

18 世紀後半から日本の書物は、商業出版の分野で多様化していくのだが、それだけではなかった。本屋がかかわらないで出版されるものや、印刷されずに手書きのままの書物である写本も根強く残った。それらも、時代とともに多様化し、かえって盛んになっていくのである。そこに、作者（著者）と出版の関係を見ることができる。

## 私家版とは

江戸時代、今日の出版社にあたる本屋が出す本だけがすべてではなかった。本屋*の出す本を「町版（まちはん）」といい、それが江戸時代の出版史の中心をなしていたことは否定できないが、どうしても商業的に**採算の取れる本**が主になる。幕府の意向にも沿わなければならない。

それにたいして、俳諧や漢詩など自費で刊行する個人の作品集、まだ名もない作者の作品など本屋では出しにくい本もたくさんできていた。このような本屋がかかわらないで出版された本を私刻本・私版本などともいうが、**「私家版（しかばん）」**といういいかたで統一しておく**。ただし、これは現代の学術用語であって、江戸時代のことばではない***。

*本屋という場合、広い意味では本を商品として扱う店全般をさすが、狭義には江戸・京都・大坂の三都（18 世紀末の寛政以後は三都に加えて名古屋も入る）にあって、かつそれぞれの都市の「**本屋仲間**」に加入している店を指す。ここの出すものだけが町版といえた。それ以外の都市の本屋がつくった本は、三都の本屋と連携して流通した。

**各藩や学者の私塾で門弟に向けて出す本、寺院などがつくる布教のための庶民向けの読みやすい本、三都以外の地方で出版された本も、町版に入らないので、私家版の範疇である。

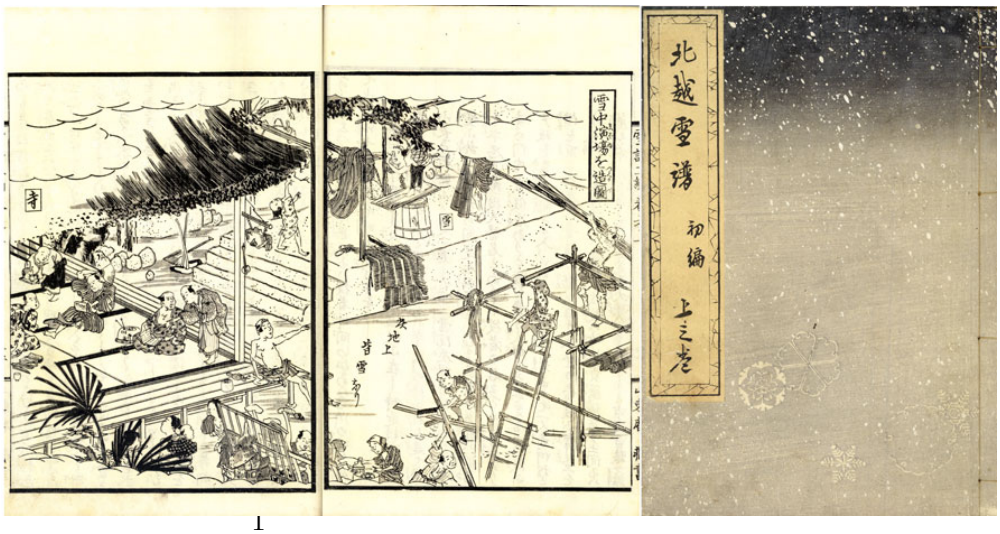
***こういう私家版を、素人（しろうと）のつくった「素人蔵板（ぞうはん）」といった使いかたで史料によく出てくる。これは「玄人」である本屋の側からみた用語である。

## 『北越雪譜』を事例として

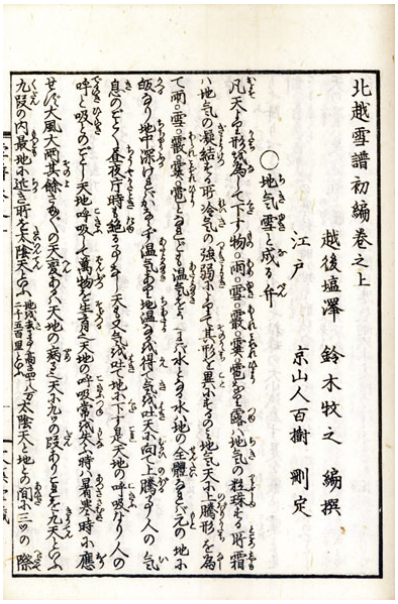
今日歴史的に重要とされている本には、私家版が多い。どうしても採算がとれるか、が商業出版に求められるからだ。本屋が正しい判断をしたかどうかは疑問もある。はじめ、私家版で出た本の評判がいいので、あわてて町版として売りたいと追いかけることはよくあった。

私家版と本屋のせめぎあいの例として、**『北越雪譜（ほくえつせっぷ）』**を見てみる。

作者の**鈴木牧之（ぼくし）**は越後の豊かな商人で、俳諧や漢詩、絵画もたしなむ地方文化人でもあった。こういう人物が自分の作品を自費で出版することはよくあった。しかし、牧之は雪国の実情を広く知ってもらいたいという希望が強く、江戸の大きな本屋から公式に出版したかった。しかし、それだけでは大都市の本屋はのってくれない。出版には大きな経費がかかり、手間もかかる。それを上回る収益をあげないと本屋はやっていけないからだ。



そこで、牧之は当時江戸で人気のあった作家・山東京伝や曲亭馬琴に協力を頼み江戸での出版を願った。
そのときの江戸と越後の往復書簡が資料として残っている。京伝らも賛同していたが、なかなか実現しなかった。馬琴の手紙には「とかく、おのれ一人おもしろがりてハ売物にならず」と本屋から出版することの厳しさを述べている。
それでも粘って京伝の息子・山東京山に頼んでようやく出版にこぎつけた。天保 7 年（1836）のことで、執筆を志した 30 代から 30 年たって牧之は 60 代になっていた。
その山東京山が刪定した。刪定とは加筆修正ということで、原作の牧之の原稿を一般向けに読みやすくした今でいうリライトである。
牧之自身の原画ををもとに京山の子息である画家・岩瀬京水が仕上げた。それを通常の墨に二種類の薄墨を加えた 3 色刷りにし、これによって雪の雰囲気が見事に表現されている。
板元は江戸の本屋・丁字屋平兵衛（文渓堂）が出した。好評だったので天保 13 年に第二編四巻ができ、全 7 巻 7 冊構成となった。

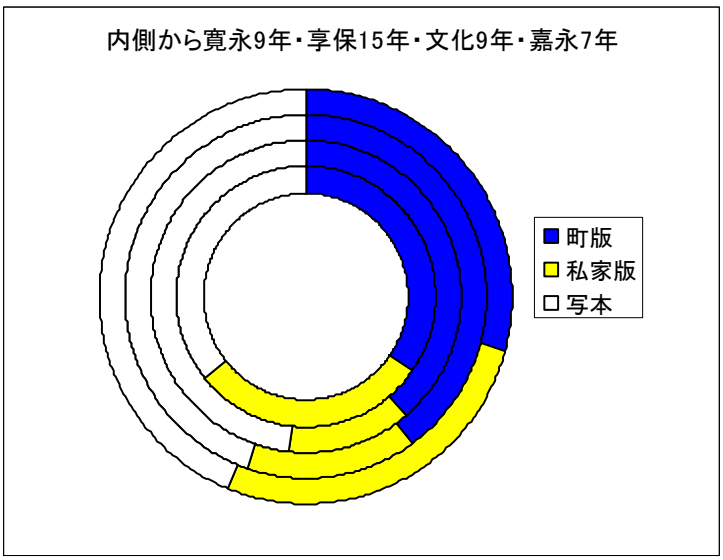

北越雪譜初編巻之上
越後塩澤　鈴木牧之　編撰
江戸　京山人百樹　刪定
○地気雪と成る事

## 地方からも出てきた新しい著作者

三都のような大都会だけでなく全国各地にも文を書いた人はたくさんいた。俳諧、和歌にいたってはもっと多い。その作品は、大半は手書きの草稿のままで終わり、せいぜい同好の士の間で筆写されて読まれるだけだった。その中で、少々蓄えのある人は自費で出版をして、もう少し広く読者を得たいと思った。それが私家版を「出す」人たちの動機である。鈴木牧之の執念には、たんなる金持ちの道楽や名誉欲を超えた強い意志を感じる。
本屋の側からすれば、採算という大きな壁がある。売れる作家ならたくさんつくりたいが、ふつうは、おいそれと右から左へ本を出し続けることはできなかった。出版実現までのハードルは高い。
著作者の側からいうと、本を出すことは大きな魅力である。売れるかどうかより、評価されたい、名誉を得たい、後世に名を残したいという欲求がある。
江戸時代の作家で、今の印税にあたるような収入を得た人は少ない。ごく一部の流行作家だけである。有力な学者でも、金銭でなく本でもらう程度だった。だから、本を出すことは、名声を求める動機が強い。

## 私家版の実態

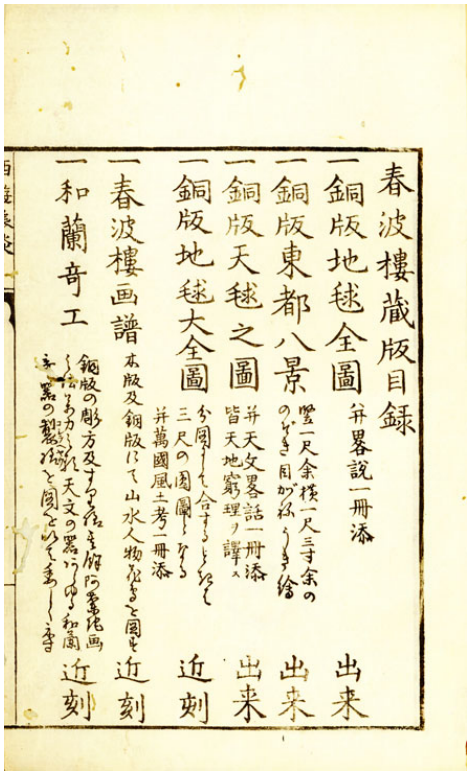
江戸時代、私家版はかなりの数が出ているが、その全貌はわかっていない。どうしても、町版に研究が集中するので、後回しにされてきたのだ。
外見上は他と差はない。どの本が私家版で、どれが町版なのかというのは、なかなか区別のつかないものである。それでも、詳細に調べると、江戸時代の版本（印刷本）のうち、およそ三分の一は私家版である。
写本も多かった。控えめに見ても江戸時代に成立した書物の半分近くは写本（手書きの本）だったとわたしは考えている。残りの版本のうち三分の一が私家版となると、むしろ町版というのは全体の三、四割程度しかないと考えられるのである。




## 知名度があっても町版にはならない例

司馬江漢の本は長崎への旅紀行文『西遊

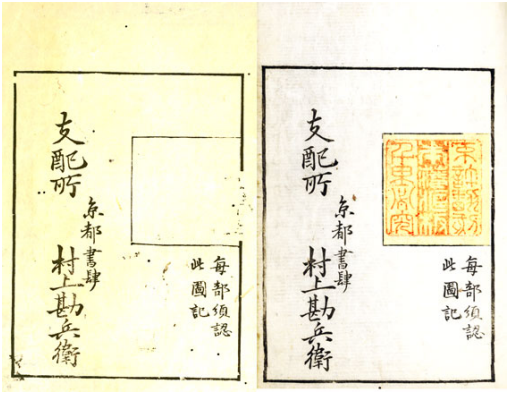
旅譚（りょたん）』（寛政２年刊=1790）をはじめ、すべてが私家版だった。奥書（今の奥付）には「春波楼（しゅんぱろう）蔵版」とあって、本屋の名が無い。すでに西洋風の画家として名をなしており、長崎ではオランダの最新の天文学も学んだ。それでも、本屋は出せなかった。知名度はあったが、キリシタンものを禁ずる幕府の方針に対して疑心暗鬼だったのだ。私家版でどうやら問題なさそうだということで、享和３年（1803）になって『画図西遊譚』と書名を変えて大坂の本屋から町版で刊行された。江漢は『刻白爾（コッペル）天文図解』という地動説を唱えたコペルニクスの著書の翻訳（部分）もしたが、これは私家版のままだった。

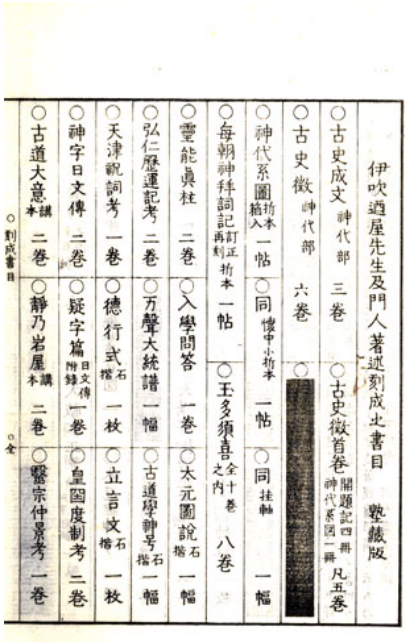



## 学校や塾の教科書も私家版

寺院や藩校、おおきな私塾などは、信者や門弟を対象とした作品や教科書をつくるが、大半は私家版である。これは本屋が出したくてもむしろ手が出ないものである。信徒や生徒の多くの販売先があるので、つねに収益は確保されるからだ。すべて自費でまかなってつくった本を既存の本屋仲間の流通網に乗せて売りたいときは、本屋仲間に加入している本屋に依頼し交渉する。了承した本屋は、通常の出版物と同じようにそれを仲間に申請し許可の割印をもらう。このとき販売権をもった本屋を「支配人」「支配所」と呼んだ。支配とは統治することでなく仕事を分け合うことをいう。下は国学者・平田篤胤（あつたね）の本の巻末にある目録。伊吹廼家（いぶきのや）というは篤胤の私塾。ほとんどここで出版し、弟子はそこから買った。

↓佐賀の蓮池藩がつくった兵法の書『孫子』の奥付。支配所・村上勘兵衛が本屋。それに蔵板者の印が捺されるのが正式。左の後刷本は捺していない




## 活字印刷の私家版

江戸時代初期には活字印刷本（これを古活字版という）が出されたが、明治以降近代的な活版印刷が始まるまでの間、主流は木版による印刷本だった。しかし、その間にも細々と木製の活字を用いた本も出ていた。これを学術的には近世活字版と呼んでいる。木活字だったので木活字版ともいう。

活字のセットがあれば、手間のかかる板木を彫る必要がなく、安く本をつくることができた。

しかい、活字版の欠点は、100 部程度刷ってから活字をばらして次の頁に使う方式だったので、増刷することができない。需要に応えるには、もう一度活字を組みなおさなければならない。大量出版ができなかったのだ。

本屋が、木版による印刷にこだわったのは、彫る手間はかかるが、板木が磨り減るまで何度でも増刷ができたからである。収益があげられる。

**私家版の多さを再認識すると同時に、現代の「自費出版」とは異なる。江戸時代の私家版には内容や程度も高い優れた著作が少なくなかった。**